

〈研究ノート〉

希少難病家族会に保育ボランティアとして参加した看護学生の体験

石田寿子* 贄育子** 森田恵子*** 笠井純子***

*姫路獨協大学看護学部 **一宮研伸大学看護学部 ***兵庫大学看護学部

Experience of Nursing Students who Participated in a Rare Intractable Disease Family Association as Childcare Volunteers

Hisako Ishida * Ikuko Nie ** Keiko Morita *** Junko Kasai ***

* Faculty of Nursing, Himeji Dokkyo University ** Ichinomiya kenshin College School of Nursing

*** Faculty of Nursing, Hyogo University

〈要旨〉

本研究の目的は、希少難病家族交流会に保育ボランティアとして参加した看護学生の体験から、看護基礎教育におけるボランティア活動の意義を明らかにし、学生支援に対する示唆を得ることである。ボランティア活動後の「ふりかえりの会」の内容を分析した結果、〈保育ボランティアの活動を通して得た新しい知識〉〈保育ボランティアの活動で生じた達成感〉〈保育ボランティアの活動で生じた困難感〉〈保育ボランティアの活動を通して考えた将来像〉の4つの体験に整理された。これらは、こころの三作用である「知・情・意」を示し、ボランティア活動は看護師として必要な対象者に寄り添う心も育む可能性が期待できた。教員が地域貢献を通して、学生のボランティア活動に対する興味関心や参加への意欲を高める機会を提供するとともに学生のボランティア活動への参加希望に柔軟に応じるための準備の必要性が示唆された。

キーワード	
ボランティア	volunteers
看護学生	nursing students
体験	experience
家族会	patient family association
希少難病児	rare intractable disease child

I. はじめに

看護とは人間の営む生活そのものに焦点を当てて、その生活がその人の生命力を消耗させないように整えていく援助過程¹⁾であり、援助の対象は生活者であるとともに人間に焦点を当てた看護行為²⁾でなければならない。看護基礎教育では、患者やその他の人々と人間対人間の相互作用について学習すること²⁾が重要な学習内容の一つであり、看護の対象と援助関係を築くために、学生自身が思考や感性など一人の人間として成長することを支援する必要がある。

ボランティア活動は生涯学習と密接な関連を有し、さらに、青少年期における教育的意義は大きいといわれる³⁾。看護学生がボランティア活動に参加する意義には患者との関係構築や患者から見た環境の理解^{4,5)}、患者のみならず家族を含めた対象理解^{5,6)}等の学習効果が報告されている。これは、看護に必要な病気の概念をひとりの人間の体験として理解すること⁷⁾や、もう一人の自分を相手の立場に立たせて描くこと⁸⁾につながっている。

今回、看護学生が希少難病家族交流会（以下、「交流会」とする。）に保育ボランティアとして参加し、その後「ふりかえりの会」を実施した。学生が語った内容は学習や学びにとらわれない体験であった。そこで本研究では「ふりかえりの会」で学生の語った内容から保育ボランティアに参加した看護学生の体験を明らかにし、看護基礎教育におけるボランティア活動の意義と学生支援に対する示唆を得ることを目的とする。

II. 希少難病家族交流会保育ボランティアの活動内容とふりかえりの会

1. 希少難病家族交流会

全国で50家族未満の希少難病児とその家族の会であり、交流会は会員の所在地を開催場所として毎年変えている。ボランティアは開催場所で募集し、交流会の企画や運営について毎年検討をしている。

2. 看護学生の参加方法

A大学の看護学生全員に対して掲示等で保育ボランティアの参加を募った。保育ボランティアとは、親たちが意見交換等を行っている間、希少難病児(以

下、「難病児」とする)とそのきょうだいを含めた子どもを対象として保育を行うボランティアであり、科目や単位との関係はない。なお、難病児の兄や姉、弟や妹を「きょうだい児」、難病児ときょうだい児を含めて「子どもたち」とする。

ボランティア参加を希望した学生は7名で、全員が小児看護学実習前の3年生であった。学生は交流会当日までに子どもたちに披露する紙芝居やメッセージ入りメダルを準備した。家族会のホームページや希少難病を調べる学生もいた。

3. 当日の活動内容

交流会は宿泊研修施設で開催し、保育の場と親たちの会場は隣接していなかった。保育ボランティアは18名で、A大学の看護学生7名以外に他校の看護学生が1名、その他は保育系と看護系教員、看護師等10名であった。参加家族は10家族であった。難病児は11名で平均8.4歳(4～19歳)、きょうだい児は6名で平均7.2歳(4～11歳)であった。

保育の対象は9歳以下の難病児ときょうだい児であり、10歳以上の年長児はボランティアの手伝いや自分のきょうだいである難病児の世話をしながら、保育の場に参加していた。学生は、担当する子どもの興味・関心や注意点等の日常生活の様子を保護者から聞いた後、色紙やボール等を使った遊び、散歩、絵本の読み聞かせを行った。

4. ふりかえりの会

交流会終了後に学生の気づきや意見を次年度の交流会企画の検討につなげるため「ふりかえりの会」を開催し、参加した感想や意見を自由に語り合った。また、家族会会長に内容を伝え次年度の交流会に活かすことを説明し、学生の了解を得て録音した。「ふりかえりの会」は自由参加とし、7名全員が参加した。参加者の希望日に3～4名ずつ2回開催した。

III. 研究方法

1. 研究デザイン

質的記述的研究

2. 研究対象

希少難病家族交流会に保育ボランティアとして参加した看護学生7名が「ふりかえりの会」で語った録音データを対象とした。

3. 分析方法

録音データから逐語録を作成し、保育ボランティアとしての活動内容、活動を通して考えたことや感じたこと等、体験について意味を損なわないように適切な長さに切り分け、コード化した。次にコードを分類し、それらのコードに共通して見いだされる意味を表すようにサブカテゴリー化をした。さらに類似性に従いカテゴリー化した。

分析に際しては、研究者間でデータを繰り返し読み、妥当性の確保に努めた。

4. 倫理的配慮

研究者の科目評価終了後に、ふりかえりの会の内容を用いた研究協力の依頼を行った。対象者には口頭と書面を用いて、研究への協力は任意であること、同意後に撤回することができ、一切の不利益を被らないこと、結果を学会などで発表することなどを説明した。

なお本研究は姫路獨協大学生命倫理委員会の承認を得て実施した（姫獨生 19-11）。

IV. 結果

1. 研究対象者の概要

対象者7名全員から同意が得られた。7名は看護系大学3年生の女子学生であり、20～21歳であった。「ふりかえりの会」は2回実施し、平均105分（100～110分）であった。

2. 学生の保育ボランティアとして参加した体験

分析の結果、24のサブカテゴリー、11のカテゴリーが生成された。それらのカテゴリーが示す体験は4つの大カテゴリーに集約された。

以下、大カテゴリーは《 》、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは〔 〕、学生の語った言葉は「 」で示し、（ ）で学生の言葉を補足した。

以下、大カテゴリーごとに述べる。

1) 《保育ボランティアの活動を通して得た新しい知識》（表1）

(1) 【難病児たちには個性があり、疾患があっても楽しく遊ぶことを知った】

当日までの準備や自己学習を通して〔参加前は、全員同じような希少難病特有の症状や障害があると思っていた〕と語っていた。しかし「イメージが変

表1 保育ボランティアの活動を通して得た新しい知識

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
難病児たちには個性があり、疾患があっても楽しく遊ぶことを知った	子どもたちの個性と楽しむ遊びが分かった	一人ひとり個性があった
		用意した遊び以外の方法で子どもたちは楽しんでいた
		一般的な子ども一日や性差について分かった
	子どもたちが面白いような関わり方があった	
参加前は、全員同じような希少難病特有の症状や障害があると思っていた	障害があると静かで歩けないイメージがあった	
	難病児たちには似たような症状があると思っていた	
難病児たちの笑顔で元気な姿を見てイメージが変わった	実際に難病児と遊ぶことでイメージが変わった	
	コミュニケーションには困らなかった	
難病児を支える役割を担うきょうだい児の気持ちを考えた	寂しさなど、きょうだい児ならではの気持ちを考えた	きょうだい児は寂しい思いをしていると思った
		きょうだい児は窮屈な思いをしていると思った
	きょうだい児は兄や姉、友達のように難病児を支える役割を果たしていた	きょうだい児の難病児に対する思いや反応が複雑ではないかと思った
		難病児のきょうだいや友達の役割をしていると感じた
家族会の必要性和家族同士のつながりの強さを知った	難病児を育てる親にとっての家族会の必要性が分かった	きょうだい児はしっかりしていると感じた
		家族会があることで、親は視野を広く持ち子育てが出来ると思った
	家族会に参加している親もきょうだい児も強くつながっていることを知った	同じ気持ちの人たちが集まり話すことが大事だと思った
		家族は全ての子どもを見守り、親同士のつながりも強かった
交流会できょうだい児同士が遊ぶことが、きょうだい児のつながりを強くしていた		

表2 保育ボランティアの活動で生じた達成感

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
ボランティアとして役割を果たしたことを実感して嬉しかった	交流会の一員として参加している実感があった	自分たちで準備したものを喜んでもらえて参加している感じがした
		自分たちで働きかけることができた
	子どもたちのことが分かって嬉しかった	安全に楽しく終わって良かった
		難病児の訴えや好きなことが分かって嬉しかった
自分を受け入れてもらえて嬉しかった	1年前の写真よりも成長していることが分かった	
難病児を育てる負担がある中でも子育てを楽しむ親の姿に感動した	楽しみながら子どもを育てている親の姿とその愛情に感動した	子どもたちに受け入れてもらって嬉しかった
		子育てを楽しんでいる親の姿に感動した
	難病児を育てる負担や悩みなど親の気持ちを考えた	親の子どもに対する気持ちは難病の有無に関係がないと思った
		親子の愛情に感動した
親との連携や他のボランティアと協力することが出来た	親と連携することが子どもたちの安全な保育につながった	親が難病児について普通に話すことがイメージと違った
		難病の子どもを育てる親の気持ちを考えた
	一人ではなく、他のボランティアがいることが心強かった	幼児期の子育ては大変だと思った
		親から教えてもらい意識して行動できた
		親から教えてもらい子どもたちを理解することができた
		対応に困った時には他の人を頼った
		同じ看護学生がいることが心強い

わったかな、自分の小さい頃に重ねてもこんなところがあったかな」と、実際に参加することで「難病児たちの笑顔で元気な姿を見てイメージが変わった」体験をしていた。そして、子どもたちと関わる中で「子どもたちの個性と楽しむ遊びが分かった」と語った。同じ疾患で個性があること、病気や障害の有無にかかわらず、子どもにとっての遊びの重要性を再認識していた。

(2) 【難病児を支える役割を担うきょうだい児の気持ちを考えた】

きょうだい児と一緒に過ごす中で、「親がその子(難病児)にかかりきになるからこそきょうだいは寂しいし」と「寂しさなど、きょうだい児ならではの気持ちを考えた」と語っていた。また「きょうだい児は兄や姉、友だちのように難病児を支える役割を果たしていた」と感じ、病気や障害のある子どもの同胞について考えていた。

(3) 【家族会の必要性和家族同士のつながりの強さを知った】

「稀な疾患だからこそ、経験談が話し合えるってというのは親にとってすごい有難いのかな」と「難病児を育てる親にとっての家族会の必要性が分かった」体験となっていた。そして「家族会に参加している親もきょうだい児も強くつながっていることを知った」と授業で学んだ自助グループについて学び

を深めていた。

2) <保育ボランティアの活動で生じた達成感> (表2)

(1) 【ボランティアとして役割を果たしたことを実感して嬉しかった】

「(紙芝居を) あんなに大人数の前ですると思わなくてすごい怖かったですよ。でも楽しんでもらえたみたいで、私たちが参加しているって感じがして嬉しかった」と「交流会の一員として参加している実感があった」体験をしていた。また、「すごい伝えているのに分からないみたいな感じが続いて、時間が経つと音楽聞きたいんだなって分かって」と「子どもたちのことが分かって嬉しかった」と肯定的な感情が生じていた。「抱っこしてほしいとか膝に座りたいとか誘導してくれるので、求めてくれてるっていうのがすごく分かって嬉しかった」と子どもたちから学生へのアプローチに対して「自分を受け入れてもらえて嬉しかった」体験をしていた。

(2) 【難病児を育てる負担がある中でも子育てを楽しむ親の姿に感動した】

「(診断名を) 伝えられた時は、本当にどんな感じの感情なのかなとすごく感じました」と「難病児を育てる親の負担や悩みなど親の気持ちを考えた」機会となっていた。そして、「小さなことを発見して喜んで成長していくことに感動した」と

難病児の母親と話をすることで、〔楽しみながら子どもを育てている親の姿とその愛情に感動した〕体験をしていた。

(3) 【親との連携や他のボランティアと協力することが出来た】

「親御さんから気を付けてって言われて、言われていなかったらちょっと見落としてたな」と親からの情報によって子どもの個性を知り〔親と連携することが子どもたちの安全な保育につながった〕体験をしていた。また、〔一人ではなく他のボランティアがいることが心強かった〕と連携や協力の大切さを実感していた。

3) <保育ボランティアの活動で生じた困難感> (表3)

(1) 【子どもたちのニーズを満たす安全な遊びが難しかった】

「何をしたいんだろうみたいな、何を指さして、読み取るのが難しかった」と難病児の訴えを理解することに困難を感じ、「すぐ次って興味が次々に移っていくっていう感覚があって難しかった」と〔子どもたちのニーズを知ることが難しかった〕体験をしていた。また、「楽しそうにしているけど、どうやって駄目だと言っていいのかな」と〔子どもたちが安全に遊べるように関わることが難しかった〕と、子どもへの注意の仕方に困難を感じていた。さ

らに発達段階が幅広く、障害の有無や程度に個性がある子どもたちに対し「(子どもたち皆で)一緒にできることが何かあればいいなっていうのはすごく感じて」と話し「遊びの内容をもっと考える必要があった」と語った。

(2) 【安全で子どもたちのニーズを満たす遊びの環境作りが難しかった】

今回の保育はある施設の一室を用いて行われ、保育施設ではなかった。そのため学生は、「幼児期の子で、すごい元気な時期で、教室でちょっと手を使ったりして遊ぼうっていうのは物足りない部分もあって」「お昼寝スペースみたいな静かなところがあったら良かったかな」と〔発達段階に応じた子どもたちのニーズを満たす遊びの環境が必要だった〕と感じていた。そして、「(子どもが投げたボールが)保育している側の方に飛んじったりとか、足元に転がっちゃったりとか、結構危ないって」と〔cと安全な保育環境について考えていた〕

(3) 【親からの期待に応えることが難しいと感じた】

保育開始前に保護者から子どもたちの生活パターンや注意事項を聞いていた。「障害がない子どもでも親御さんは安全面が一番気になると思うんで、怪我したってなったら責任をどうしようと怖かった」と責任の重さを感じ、また、「歩くのもトレーニングになるから歩いてくれたら嬉しいなってことだっ

表3 保育ボランティアの活動で生じた困難感

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
子どもたちのニーズを満たす安全な遊びが難しかった	子どもたちのニーズを知ることが難しかった	子どもたちの訴えを理解することが難しかった 子どもたちの希望する遊びをするのが難しかった 子どもたちの楽しめていない表情が寂しかった
	子どもたちが安全に遊べるように関わることが難しかった	子どもたちへの注意の仕方が分からなかった 順番を守る促し方が難しかった
	遊びの内容をもっと考える必要があった	発達段階の応じた遊びが出来たらよかった 障害の有無に関係なく、みんなで遊べる保育があったらいい
安全で子どもたちのニーズを満たす環境作りが難しかった	発達段階に応じた子どもたちのニーズを満たす遊びの環境が必要だった	身体を使って遊ぶ場所があったほうがよかった 日光に当たる場所があったほうがよかった 午睡するためのスペースがあるとよかった 子ども目線で家具を考えたらよかった
	交流会の限られた環境で危険と感じることがあった	動的な遊びと静的な遊びが一つの場所で行われて危険だった
親からの期待に応えることが難しいと感じた	親から子どもたちを預かる責任と期待を感じ、応えられるか悩んだ	何か起きたらどうしようと不安だった 親の要望に応えるための方法に悩んだ 普段の様子が分からなくて困った

たんですけど、抱っこしてって感じてくるので、どうやって歩かせたらいいんだろう」と親からの希望に応える方法を考えていた。

4) 《保育ボランティアの活動を通して考えた将来像》(表4)

(1) 【家族会のことを今後も支援していきたい】

「1年で大きい成長があるから、それも是非見てほしいっていうのを(母親から)言ってもらって、確かに気になるなって思って」と「出会った子どもたちの将来を知りたい」と対象が成長発達過程にある小児ならではの視点を持ち、今回の交流会で出会った子どもたちの今後を気にしていた。そして「(ボランティアとして)参加して、そこで得たものを友達なり、家族なり、伝えていけたらいいと思います」と「家族会のことを発信していきたい」と考えていた。

(2) 【自分から行動して世界を広げたい】

「誰もいない中に飛び込むのは不安が大きいから思い切っでできないのかなっていう部分があった」と「これからも継続して人との出会いを広げたい」と感じ、ボランティア活動の継続を考えていた。また、「看護だけ、病院だけじゃなくて、外をもっと見てみたいと思う」と「もっと広い世界を知るために行動したい」という目標を語っていた。

V. 考察

学生が保育ボランティアの体験を通して得たことは、新しい「知識」、活動を通して感じた達成感や困難感の「感情」、今後の自分の行動に関する「意志」であり、こころの三作用⁹⁾である「知・情・意」を

示していた。

学生は保育ボランティアの活動をふりかえり、「嬉しい」「難しい」など、保育ボランティアとして子どもや家族との相互作用の中で学生自身に生じた感情を語っていた。これらの感情とともに語られた内容は、子どもを理解できたことや、子どもの求める遊びに対して悩んだことであった。これらは、子どもやその家族と主体的にかかわり、寄り添うことによって得た気づきや発見であったといえる。

学生は保育ボランティアの活動を通して「知った」「考えた」と語り、これらは思考、知能、認知を含む働きである「知」に該当していた。学生は、希少難病の自己学習からのイメージと、看護基礎教育の中で得た疾患や障がいのある人々の生活、発達段階に関する知識を持っていた。そのため保育ボランティアの活動の中で、事前のイメージや知識と比較して、学生は「イメージと違った」と語っていた。「知」は意識的活動といわれ、何かと別の何かを区別したり、何かと別の何かと一致させたり、また何かを持ち続けることであり、はじめに基礎となる「何か」が必要¹⁰⁾といわれる。今回、事前に対象となる疾患の自己学習や看護基礎教育での知識の積み重ねが、ボランティア活動による「知」につながっており、先行研究で報告されているボランティア活動の学習効果と合致していた。

また、学生は「～していきたい」と、将来の自身自身や家族会の支援のために必要な行動を自覚して言語化していた。意志には欲求と欲求に対応した目標が必要¹¹⁾といわれるが、保育ボランティアの活動を通して生じた感情や得た知識が学生の意志形成

表4 保育ボランティアの活動を通して考えた将来像

カテゴリー	サブカテゴリー	主なコード
家族会のことを今後も支援していきたい	出会った子どもたちの将来を知りたい	子どもたちの帰宅後の様子が知りたい
		子どもたちの成長が気になる
	家族会のことを発信していきたい	家族会の情報を伝えていきたい
		ボランティアで得たことを伝えていきたい
自分から行動して世界を広げたい	これからも継続して人との出会いを広げたい	今回の出会いを広げていきたい
		継続することで新しい出会いや気づきがあると思う
		困ったことを他の人と話し合いたい
	もっと広い世界を知るために行動したい	一人で行動する力に憧れる
		医療に限定せずにもっと他のことを知りたい

につながったといえる。また、学生が語った疾患や障がいのある人々の生活を支援していきたいという意志には、看護師としての意識と、社会の一員としての意識が含まれている。これらは個人としての成長につながるとともに、看護師として必要な対象者に寄り添う心を育む可能性が期待できる。

今回のボランティア活動によって得られた「知・情・意」はバランスよく育成されることで全人格的教育が満たされる¹²⁾。ボランティアは自発的に行動する人¹³⁾であり、参加の意志を表明することから始まる。また、意志的な行為を可能にして支えているのが、手段目的関係を構造化する「知」や、行為の遂行を動機づける「情」¹⁴⁾であり、様々な状況によって左右される¹⁵⁾という。

社会に開かれた教育課程として、地域社会の一員として教員がボランティア活動を行うことやボランティア活動の教科化教育課程全体に適切に位置づけ総合的に推進することが求められている¹⁶⁾が、大学でのボランティア活動に対する単位認定はその理念に与える影響から慎重論が根強い。単位認定の有無にかかわらず、ボランティア活動に積極的に参加する土壌を築くために、教員が地域貢献を通して、学生のボランティア活動に対する興味関心や参加への意欲を高める機会を提供するとともに学生のボランティア活動への参加希望に応えるように努めていきたい。

VI. 結論

看護学生が保育ボランティアとして参加した体験は、〈保育ボランティアの活動を通して得た新しい知識〉〈保育ボランティアの活動で生じた達成感〉〈保育ボランティアの活動で生じた困難感〉〈保育ボランティアの活動を通して考えた将来像〉の4つの大カテゴリーに整理され、こころの三作用⁹⁾である「知・情・意」を示していた。ボランティア活動は、看護師として必要な対象者に寄り添う心も育む可能性が期待できる。

謝辞

学生のボランティアを受け入れていただきました希少難病児家族会の皆様に深謝申し上げます。

本研究は第34回日本保健医療行動科学会学術大会で発表したものに加筆、修正したものである。

文献

- 1) 金井一薫：第4章 看護の視点で人間と生活をみつめる、ナイチンゲール看護論・入門 “看護であるものとなないもの”を見わける眼, 60-69, 現代社, 東京, 1993
- 2) Joyce Travelbee : Inyerpersonal Aspects of Nursing, Edition 2, Philadelphia, 1971 (長谷川浩, 藤枝和子訳: トラベルビー人間対人間の看護, 64-66, 医学書院, 東京, 1974)
- 3) 国立教育政策研究所: 第2章 ボランティア活動の支援・推進について, II ボランティア活動に関する答申等 (昭和46年～平成23年), https://www.nier.go.jp/jissen/book/h27/pdf/v_02.pdf
- 4) 笠井由美子, 小濱優子, 中村滋子: 看護学生のアロマハンドマッサージを用いたボランティア活動の学び (第2報) —看護学生の臨地実習の経験に着目して—, 川崎市立看護短期大学紀要, 23(1), 35-42, 2018
- 5) 寺澤香純, 遠藤芳子: 難病のこどもと家族支援のボランティア活動に参加した看護学生の体験とその意味, 北日本看護学会誌, 14(2), 21-28, 2012
- 6) 増谷順子: 地域で暮らす若年性認知症へのボランティアを通じた看護大学生に対する教育実践の検討, 老年看護学, 21(2), 67-74, 2017
- 7) 前掲2) 121
- 8) 薄井坦子: 新装版 科学的看護論 第3版, 135-151, 日本看護協会, 東京, 2015
- 9) 山鳥重: 知・情・意の神経心理学, 15, 青灯社, 東京, 2008
- 10) 前掲10) 86-87
- 11) 春木豊: 「知情意」とは何か, 教育と医学, 10: 4-11, 2002
- 12) 高野清純: 知・情・意の再考, 教育と医学, 10: 4-11, 2002
- 13) 巡静一, 早瀬昇: 基礎から学ぶボランティアの理論と実際, 大赤ボランティア協会監修, 5-6,

中央法規出版, 東京, 1997

- 14) 岩田純一：意志の芽生えと発達, 教育と医学, 10 : 45-49, 2002
- 15) 笠井仁：意志のコントロール, 教育と医学, 10 : 68-75, 2002
- 16) 教育課程内外の教育活動, 家庭や地域社会との連携等に関する資料 (平成 28 年 5 月) 文部科学省資料, http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/076/siryo/__icsFiles/afieldfile/2016/05/31/1371318_4.pdf